

第6章 都市デザイン研究室の特色

空間研究の定着を図るまちづくり活動

修士課程1年生が最も多くの時間を割くことになるのは、グループで取り組むプロジェクトです。全国各地の地域と連携し、まちの望むべき将来を思い描き、それを具体的な空間やシステムの計画・デザインとして提案していくという、都市デザインの基本的な考え方、専門的な技法を、実践的なフィールドにおいて獲得していきます。(都市デザイン研究室ホームページ「研究室の紹介」)

当研究室では、都市空間研究だけでなく、その定着を図るために実際のまちづくり活動にも取り組んでいる。現在、広い意味での都市計画は大きな転換期にあり、大学としても積極的に地域と連携して、次世代のまちづくりを考えていく必要がある。(西村幸夫) 東大先端科学技術研究センターホームページ「都市保全システム」



『都市デザイン研マガジン』112号(2009.12.16)

基礎から手法研究までとまちづくり

『観光まちづくり』における具体的に地名の挙がった地域については、旧大野村、喜多方などのほか、東大まちづくりプロジェクトに関わる地域を含めて、その実績の全容を記述してきた。すなわち、東大まちづくりプロジェクトの活用による「観光まちづくり東大方式」の模索のための全容把

握である。

ところで、都市デザイン研究室まちづくりプロジェクトは何か、ということである。完全に学生の自主性にまかされ、したがって拠点の変動はあるものの、その位置づけはどうであろうか。その答えは、研究室ホームページで明確な規定を知ることができる。まず前提として認識しておきたいのは、そもそも都市デザイン研究室とは何か、ということである。それは、次のように書かれた概要で知ることができる。

都市づくりやまちづくりにおいて、物的な環境や空間を通して関係する主体や要素、制度、分野の創造的な統合を図るのが都市デザインです。当研究室は、都市空間の基礎研究から手法研究まで幅広く、かつその定着を図るために実際のまちづくり活動にも取り組んでいます。これまでに国内やアジアの都市において、調査から計画・デザインの立案、実現のための組織・制度・事業の設計を行っています。

現在、広い意味での都市計画が大きな転換期にあり、大学としても積極的に地域と連携して、次世代のまちづくりを考えていく必要があります。特に、空間的な問題については取り組みが少なく、当研究室の役割も大きいと考えています。

広範な研究範囲であるが、このうち「基礎研究から手法研究」と「実際のまちづくり活動」および「設計」といった点に、まちづくりプロジェクトの位置づけを見出すことができる。では、各論はどうか。それは次の「研究の枠組み」のうちに重複してみられる。

- (1) 都市デザインのあり方、その理論と方法に関する研究
- (2) 都市空間に関する理論、分析や提案
- (3) 都市形成に関わる歴史研究、都市計画史の研究
- (4) 風景や景観の特質の分析や形成の手法に関する研究や提案
- (5) 歴史的環境や建造物の保全や活用に関する研究や提案
- (6) 海外の都市デザインに関する研究と日本との比較やその応用
- (7) 参加型・協働型まちづくりとその過程や組織に関する研究と提案
- (8) 自治体の都市空間政策に関する研究と提案

上記の枠組みで、研究の蓄積と展開を図っています。具体的研究活動は学生の企画によって運営され、研究テーマも学生が自ら考え行動することを基本としています。

この枠組みのうち現地でプロジェクトを進めていく場合、実践ノウハウとして(7)が重要であろう。その地区に参入してまちづくり実験をするのであるから、参加・協働の形をとらざるを得ないからである。

次には、風景・景観・歴史的をうたった(4)と(5)である。西村が環境法制定のプロモーターであったように、この研究室は風景・景観論のメッカである。歴史的、いいかえれば歴史性は、西村の名著『都市保全計画』の主軸を成すものであり、研究室のプロジェクトでも、歴史性の発見・保全に力を注いでいる。

具体的活動は学生に任されているという一節は、重要である。活動は学生、この場合ほとんど院生であるが、基本としてとあっても、確かにほとんどその自主性にまかされている。西村の器量の反映であり、研究活動も完全に自主性が確保されている。その「研究活動」については、次のように書かれ、「まちづくり」という語が登場する。

都市デザイン研究室は、広く社会や地域に開かれ、情報や研究の蓄積を通してまちづくりを支援するデザインセンターとしての役割を持つことを目指しています。特に、「公共的空間」(市民

が共有しうる物理的空間、市民が自由な活動を行いうる社会的空間)の研究と実現の手法が課題と考えています。

研究活動は、所属メンバーによる研究蓄積を始め、地域との連携による調査研究や提案、自治体やまちづくり組織・企業との協働による計画・デザイン、またこれらの成果を論説やコンペなどを通じて社会的発言していくと、幅広いものとなっている。

今後、都市空間の形成や計画、デザインに関わる歴史を踏まえ、「理論構築」「社会実験」「空間研究データベース」を進め、他領域研究領域や専門家とのコラボレーション、都市に関わる組織、市民組織との連携やネットワークづくりを進めていきたいと考えています。

ここで「広く社会や地域に開かれ」を掲げ、「蓄積」を通じて「まちづくりを支援する」と明確に書かれている。それがよくある建前論ではない研究室であることは、研究室に所属して体験できた。この自主性の確保は、次の「大学院生の日常活動」のように完全に守られている。

院生の日常の活動

都市デザイン研究室の大学院生の日常の活動を簡単にご紹介します。

修士課程1年生が最も多くの時間を割くことになるのは、グループで取り組むプロジェクトです。全国各地の地域と連携し、まちの望むべき将来を思い描き、それを具体的な空間やシステムの計画・デザインとして提案していくという、都市デザインの基本的な考え方、専門的な技法を、実践的なフィールドにおいて獲得していきます。

修士課程2年生、そして博士課程の学生は、上述のプロジェクトに総括的な立場に関わりながら、実践の中で得られた問題意識や関心を基に、より普遍的な知見の獲得を目指した個人個人の研究を進めていきます。その成果は、修士論文、博士論文、更には学会論文、学会発表、雑誌論文としてまとめられます。

又、これらのプロジェクトや個人個人の研究の成果は、学生の発意で月二回ほど開催される研究室会議で、順次発表されます。ほぼ研究室の全員が参加する研究室会議での情報共有や議論は、研究室の全ての活動の豊かな源泉となっています。

学生の生活という親近感のあるコメントを立てているところに、研究室のアットホームな性格がうかがわれる。この文章のなかで、最も重要なのは、「グループで取り組むプロジェクト」という箇所である。

それに、全国各地の地域と連携し、まちの望むべき将来を思い描き、それを具体的な空間やシステムの計画・デザインとして提案していく、そのフィールドがまちづくりプロジェクトであり、理系のたださえ時間不足な日々において、大きな時間を割いて打ち込むまちづくりプロジェクトにおける学生の初体験は、社会人が体験する以上に、新鮮な衝撃に満ちている。

自主性が確保されているため、論文にまちづくりプロジェクトの記述が増えているが、まだ集約する機能がないため、散発的にそうした論文の存在を知っているのが現状である。まちづくりプロジェクトのデータベースが望まれる。

先端研に「都市保全システム」

ところで、2008年4月から教授西村幸夫は、駒場リサーチキャンパスにある先端科学技術研究センター教授であり、「都市保全システム」を研究分野として前進させている。先端研のいまの研究分野は、「情報」「バイオ」「環境エネルギー」「バリアフリー」「社会」に大別されている。都市保

全システムは、「環境エネルギー」に分類されている。都市デザイン研究室は本郷の工学部 14 号館内のままであり、先端研ホームページの「研究者リスト 研究分野別」の「教授西村幸夫 都市保全システム」には、次のメッセージが載っている。

魅力ある都市空間と都市生活を創造する為の方法論を探ることを目標としている。当研究室では、都市づくり・まちづくりの分野において、物的な空間を通しながらも、これに関係する主体や要素、制度、分野の創造的な統合を図る「都市デザイン」という視点を重要視している。中でも特に、それぞれの都市がこれまで積み重ねた「歴史」は、現代の都市生活を豊かにするためにも大変貴重な側面の一つであり、これらの都市生活・都市文化をどのように継承しながら「持続可能な都市」を考えるかという意味で、都市空間・都市文化が抱えてきた歴史をどのように継承するか、「都市保全システム」の体系を視野に入れた研究活動を行っている。

という概括につづいて、次に「実際のまちづくりに取り組んでいる」という表現で、まちづくりを登場させ、その意義は「研究の定着」にあるとしている。

当研究室では、都市空間研究だけでなく、その定着を図るために実際のまちづくり活動にも取り組んでいる。現在、広い意味での都市計画は大きな転換期にあり、大学としても積極的に地域と連携して、次世代のまちづくりを考えていく必要がある。特に、空間的な問題については取り組みが少なく、当研究室の役割も大きいと考えており、そのため、これまでに国内やアジアの都市において、調査から計画・デザインの立案、実現のための組織・制度・事業の設計活動も行う事を目指している。

東大の研究室は膨大な数に上るが、都市デザイン研究室のように、理系の制約のなかで、実際のまちづくり活動を通して研究を定着させているところは異例であろう。西村の理想の高さ、それを貫き通す信念、それにひるまず、将来リーダーを約束されたエリート学生たちが、この体験型のシステムを停滞させずに、通年活動を継続していることに感銘を受ける。先にこのまちづくりプロジェクトを、17 世紀発祥の英国エリートのグランドツアーに比したが、それどころではない誇るべき都市デザイン研グランドツアーである。

先端研というと、ぎらぎらした最先端の高度科学技術を想像するが、そこにヒューマンスケールの手づくり流の都市デザイン研究室がつながるのは、痛快である。『都市デザイン研マガジン』で、坂内編集長が「京浜臨海」記事で、「たこつぼ」と表現していた実感は首肯できる。ノーベル賞研究者を生んでいくような先端研にまちづくりが店を構えていることは、東大のふところの大きさを示す。

西村は助教授時代に古い建物の先端研にいたことがあった。ナノテクノロジーなどの一方で、この素朴さを配する東大のバランス感覚に感銘を受けたことを記憶している。『都市デザイン研マガジン』97号(2009.4.25)は、「駒場リサーチキャンパスのあらたな展開」の見出しで、先端研訪問記事を載せた。



昼食会での歓談



広々とした個人スペース



奥に見えるのは生産研



自由に使えるラウンジ

「今春、当研究室の一部が先端科学技術研究センター(駒場リサーチキャンパス内)に移動しました。周知のとおり研究室メンバー増加に対し、14号館2階院生室を明け渡す決定が下り、席数が足りなくなっただけです」

といった書き出しで、4月22日にキャンパス内のレストランで、研究室全員が集まって開いた、昼食会の模様を伝えた。机が広く本棚が充実し、必要なOA機器はそろっていた。「駒場には志高い人が来た」と、西村は笑顔で発した。そういった充実以上に坂内編集長のいう「タコツボ式」学際の実感が輝いていたことは、安堵する光景だった。まちづくりプロジェクトは、この基地からも出撃するのである。

『都市デザイン研マガジン』史

2005年4月創刊、2009年6月100号突破 多角報道

なかなか研究室内部同士でも、お互いがなにをやっているかわからなくなってしまうほど、大盛況な近年のわか研究室ですが、そういった折にも、マガジンがあることでお互いの心もつながるばかりか、OBOGをはじめ、研究室のことをいつも気にかけて下さる方々との心のつながりが生まれる「絆」のマガジンだと思っています。今後も、火の絶えない研究室の現状をルポすると同時に、いつも気にかけて下さる応援団の方々とココロがつながる、読者目線の、そして自信をもって世界に発信できるメッセージを伝え続けてください。(野原卓)

ハノイの研究室旅行で色々な人と付き合っ、マガジンの創刊を決意した。素晴らしい情報に溢れかえっている研究室の方々が、内外に知られざる存在であることは勿体ないと感じた。沸き立つ充満したマグマの都市デザイン研究室をよく外に吐き出さないで、平常心でいられるものだと不思議だった。(酒井憲一)都市デザイン研マガジン 100号(2009.6.10)



『都市デザイン研マガジン』100号記念編集長対談を終えて(14号館会議室、2009.5.28)全99号(100号に掲載)

新聞係りから編集委員制に

都市デザイン研究室は、希望学生が多くて、学内きっての大型研究室である。都市工学科のなかでも都市計画が専門であるが、まちづくりにキャリアのある西村イズムの場合として、都市計画を「まちづくり」と敷衍することで、市民社会のまちづくり現場の実践を研究室のシステムに明確に位置づけられている。ハードでプロフェッショナルな都市計画の構想・設計をこなす一方で、学生たちはまちづくり地域の社会に若い身をおいて、懸命に汗を流す。

それだけに、研究室の席不足はすさまじく、研究生の私は割り当てがなく、空席を確保してもすぐに奪回されてしまった。しかし、そうした研究室のマグマを噴出させる装置がなかった。2004

年 11 月 11 月にハノイ研究室旅行に参加して、学生たちの間を遊弋して取材した結果、研究室の情報メディアづくりの必要性を感じていた矢先だったので、その実践を決断した。

そこで翌年 4 月 15 日、西村裁決を経て自主的責任編集ということで、『都市デザイン研マガジン』はスタートした。助手（のちに助教）中島直人と修士 1 年の坂内良明と私の 3 人で、毎週編集会議を継続し、月 2 回の発行を厳守した。

記事書きが負担になるであろう集団であることを勘案して、わずか 3 行でも書いてほしいという勧誘手法として、3 行記事の積み重ね方式を考え、編集も A4 判裏表 2 ページの建て頁にした。

このうち、レイアウトについては、都市工の学生はコンペ流にベテランであるから、いつかそうした誌面になっていくことは予測したが、2006 年 6 月の 29 号から「Urban Desigh Lab.Magazine」と大きな英語表記に、「都市デザイン研マガジン」を肩に添えたいまの題字となった。といて、題字は『都市デザイン研マガジン』が正式である。3 行記事積み重ね方式はすでに克服され、若いエネルギーの活発な誌面になっていった。

以後は、その磨きのかかった工学的流儀の誌面を、編集者がそれぞれの個性的レイアウトで仕上げ、絢爛たるマガジンとなったが、2 ページという建て頁は変わっていない。しかし、臨時ワイド版や増ページも含め、ますます多彩な誌面になり、まちづくりプロジェクトの記事は積もり積もって、今回悉皆調査したところ膨大な記事量になっていた。

この悉皆調査で困ったことは、誌面のまちづくりプロジェクトのデータが、ほとんどセキュリティのためか、ダウンロードできなかったことである。そこで、記事のコピーをみながら、時間をかけて一字ずつ打っていった。それこそ膨大な打字作業だったが、一字一字打ち込むので、一字一字読み込むことができ、ディテールまで捕捉できた。写真だけは、ダウンロードできて助かった。

組織については、当初は「新聞係り」だったのが、マガジンプロジェクトとしての地歩が高まり、編集委員となり、酒井と坂内の 2 人で発足した編集部が、いまでは 4 倍の 8 人という躍進ぶりで、英語版も発行するなど高度成長を遂げている。

次に創刊号とともに節目である「研究室と共に歩んでマガジン」の 50 号（2007.5.10）と 100 号到達、そして 200 号への 100 号記念号（2009.6.10）のフロントを掲載しておく。

まちづくりプロジェクトの記事については、プロジェクト別に仕分けてすでに全収録済みであるので、活用してほしい。研究室ホームページの「プロジェクト」は、更新時に旧内容が削除される場合があるため、安定した公開データとしては、いまのところ『都市デザイン研マガジン』だけとなる。

バックナンバーPDF

都市デザイン研究室ホームページの「マガジン」を開くと、<「都市デザイン研究室編集「都市デザイン研マガジン」2005 年、研究生酒井憲一氏の責任編集で創刊された「都市デザイン研マガジン」は、今年度も月二回、発行いたします。研究室の“今”をお伝えしていきます。どうぞ、よろしくご愛読のほど、お願い致します。>と現れる。

つづいて、創刊号から各号の「主な記事」のリストがつづき、クリックしてどの号も PDF 閲覧できる。この「主な記事」のメニューはなかなか面倒が行われぬものであるが、これがあるとないとでは索引の有無で図書の信頼性を評価されるのと同じである。また、毎号発行時には、コピーが研究室全員に配布され、ペーパーとウェブの両サービスが行われている。研究室先輩にはペーパはいかないので、『都市デザイン研マガジン』の検索で気軽に読んでほしい。

都市デザイン研マガジン 創刊号

毎月 1&15 日発行

2005.4.15 東大西村・北沢研究室 編集・発行人 酒井憲一

西村教授著『都市保全計画』の大著刊行とハワイ旅行で盛り上がった研究室

2004 年は西村幸夫教授の大著『都市保全計画』（東京大学出版会、04 年 9 月 28 日）が刊行される一方、11 月 28 日～12 月 2 日は研究室旅行でハワイに遠征するなど、研究室は盛り上がった。同著は 15 年来の講義の集大成で、1050 ページに及ぶ準典兼教科書である。刊行後初の講義が今年 4 月 7 日に開講し、学部 4 年生 40 人が教授から同著をはじめ 20 冊の実物文献を前にした講義授業を受けた。



研究室で 20%オフ 12,000 円でぜひお求めを！



⇒左の本、研究室から全員に配付 受け取っていない人は仙道さんに申し出てください。
西村「都市保全計画」講義と大学院「都市環境特論 1」に皆出席した聴講生酒井がその都度自発的に提出した小論文が、研究室ホームページに「熟年聴講生日誌」として 9 月から公開され、同聴講生が記した講義ノートの要約を第 I 部、小論文を第 II 部としたブックレット『教え子のノートが記した歴史の講義 西村幸夫「都市保全計画」&熟年聴講生日誌』が 12 月にアメリティライフから刊行された。160 ページ、890 円。

創刊号フロント（一部）2005 年 4 月 15 日付

Urban Design Lab. Magazine
都市デザイン研マガジン vol. 50

2007.5.10
50 号記念特大号

編集長 酒井憲一
編集委員 石井真由 渡辺洋子 朝日登 中野 穂山由緒 大島有佳

研究室と共に歩んでマガジン50号

二年間休まず発行、ヒューマンな公式メディアめざして

2005年4月に刊行された本誌は、隔週で休まず発行を続けて、今年で50号を迎えた。研究室活動の全体像を、迅速に、分かりやすく、且つ軽やかに、研究室の内外へ発信していく、という理念は、どれだけ達成されているのか。創刊以来、本誌を隔り続けてきた同僚に、評価をお願いする（左頁）とともに、紙面からこの二年期の研究室を振り返った（右頁）。

両教授が採点するマガジン「通信簿」

	西村幸夫教授	北沢猛教授
1. 通常記事の内容	良 可 不可	良 可 不可
2. 特集・企画記事の内容	良 可 不可	良 可 不可
3. 分量	良 可 不可	良 可 不可
4. 外へ向けたわかりやすさ	良 可 不可	良 可 不可
5. 面白さ	良 可 不可	良 可 不可
6. レイアウト	良 可 不可	良 可 不可
7. 発行ペース	良 可 不可	良 可 不可
8. 編集担当の熱意	良 可 不可	良 可 不可

印象に残っている記事

- ・初期のハワイ訪問記事
- ・タイ研究室旅行の特号
- ・OG永井さんの電子訪問記事

マガジンへの一言

この冊子で発信して下さい。毎号楽しみにしています。

「都市批評」のようなものが、短くてもいいので毎回あるとよいですね。熱く読んで嬉しいです。

マガジンで振り返る都市デザイン研2005-2007

■全国・海外に広がるまちづくり活動

充実のプロジェクトこそが、わが研究室の真骨頂。「環境に学ぶ」のモットーを掲げて、従来よりあった「暮多房」「熱の海」「大野村」「京浜臨海部」に加えて、2005年には「八風」が、2006年には「新橋」「都立大学の集約」が、それぞれスタート。新橋編・北沢研の2006年に発足して、「地」も動き出した。「かけもち」が常態となるプロジェクトは、この二年期のうちに急速に進行したと言えよう。全国や海外まで、都市デザイン研のまちづくりが試みられていった。

2006年ハワイ、2006年バンコク、と行われた研究室旅行では、アジアの都市をじっくり歩きつつ、建物の大学とまちづくりの関係・方法等について詳しく情報交換を行った。また2006年には、M1（臨時）院生を中心としたメンバーが、イタリアで行われた先進地の建築ワークショップに参加。研究室活動の舞台は、国内に止まらず海外へと広がった。

■2006年度は博士3名を輩出

2006年度のユラモン・積チユラロンコン大賞に続き、2006年には、中島直人院生の選考を伴っての都市研究賞、3年のスペイン留学の成果をまとめた河部大輔・建設学研究所院生、社会人生活と研究生活の二足のわらじを履いて論文を発表した永井真由 O.G. 3名が博士号を取得した。後に続くのは誰か？

■OB・OGの活躍

修了したOB・OGが、各界でまちづくりに関わってゆく。残り多き二年であった。研究室関係の手によるまちづくり関連書籍の刊行回数も、多かった。マガジンでは、前に送られてOB・OGによりその活躍を取り上げるほか、結婚、出産などのプライベート情報もフォローしていった。

■研究室環境への批判と提言

まちをデザインする者が、自らの経験する場である研究室の環境に無関心であってはならない。そうした理念に基づいた、さまざまな革新的提言がなされていった二年でもあった。大隈館、高層機設備などの物理的環境にとどまらず、「廃棄」ははらひの多い手塚について提言が提出されたり、書庫の生活アンケートから、行き過ぎた「プロジェクト集」主義に警鐘が鳴らされたりもした。

50 号記念特大号フロント 2007 年 5 月 10 日付

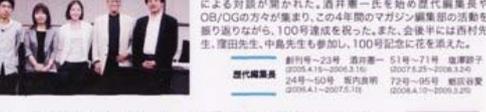
都市デザイン研マガジンは「不易流行」たれ

Holding on the principle of fluidity and immutability
2005年4月15日の第1号発行から4年2ヶ月、都市デザイン研マガジンは遂に記念すべき100号を迎えた。

Four years have passed since the first issues of Urban Design Lab magazine on April 15th in 2005 and the magazine celebrates its 100th issue. Trackers and the former chief editors told us its four-year history and the vision for the vol. 100.

歴代編集長揃い踏み マガジンに懸けた思いを語る

The former chief editors looked back on the memories of the magazine.



酒井 憲一 塩澤 諒子 坂内 良明
2009年5月28日(木)、14号記念室にて、マガジン歴代編集長による対談が開かれた。酒井憲一氏を始る歴代編集長やOB/OGの方々が集まり、この4年間のマガジン編集部の活動を振り返りながら、100号達成を祝った。また、企業界には西村先生、窪田先生、中島先生も参加し、100号記念に花を添えた。

一都市デザイン研マガジン発行100号記念特集

Celebration for the 100th issue of Urban Design Lab. Magazine

ずっと読んで来ていた。ただ印刷は大変になりながら編集作業は進んでいって来たから(笑)昔年巻のマガジンは、細いところの工夫が目立っていました。

「デザイン」の価値

【デザイン、価値問題】
巻一その20号で、都市デザイン研マガジンという名前が通じたのかと疑問を呈して、この号だけは「都市デザイン研マガジン」にしてみました。

一人でも書いたメモクラフシーではない

【一人でも書いたメモクラフシーではない】
一紙灰谷さんの編集長「雑々まで、濃淡なく、記事の充実を望みたい」はどのような意図があったのかです。

編集者の「声」を聴く

【編集者の「声」を聴く】
一紙編集時代の思い出の記事はありますか？
巻一12号、先生方の学生時代の「白」を編集したことが、先生方に伝わるまで、あれこそ文化祭の足跡、まろ香かきかき、先生方の足跡です。



100号記念特大号フロント 2009年6月10日付

< 100号記念特集号(2009.6.10) > 都市デザイン研マガジンは「不易流行」たれ

2005年4月15日の第1号発行から4年2ヶ月、都市デザイン研マガジンは遂に記念すべき100号を迎えた。「これまでの100号、これからの100号」を先生方や歴代編集長に語っていただいた。

西村教授 ひよっとすると、日本の大学初の100号。

窪田准教授 マガジンと接点少ない世代にも寄稿依頼を。

歴代の編集長・編集委員(都市デザイン研究室ホームページ)2010.7.1現在

- 編集長
酒井 憲一(創刊号~23号) 坂内良明(24号~50号)
塩澤諒子(51号~71号) 蛸灰谷愛(72号~95号)
菊地原 徹郎(96号~119号) 阿部正隆(120号~)
編集委員(29号から題字下に当該編集長・編集委員名を表示)
2005年度酒井憲一、2005年度~2006年度坂内良明、
2006年度~2007年度坂内良明、石井宏典、塩澤諒子、
2007年度~2008年度石井宏典、塩澤諒子、蛸灰谷愛、平岡惟、増田圭輔、矢原有理、
2008年度~2009年度蛸灰谷愛、平岡惟、増田圭輔、矢原有理、ジャック ファリス、菊地原徹郎、中島和也、藤井高広
2009年度~2010年度菊地原徹郎、中島和也、藤井高広、ジャック ファリス、阿部 正隆、鈴木 亮平、櫻庭 敬子、山下 航司、櫻庭敬子、芝尾茉莉子、前川綾音、村本建造、安川千歌子

マガジンの効用

都市デザイン研マガジンの創刊は2005年4月であるが、それまでは同じ研究室に属しても、隣は何する人ではないが、誰が何を研究しているのか分かりにくかった。研究室会議で一堂に会した折の議事によって、初めて知り得ることが多かったのである。

それがマガジン発行後、この壁は大きく破られ、まちづくりプロジェクトのことも世界へ向けて

発信されている。それにしても、学生たちはまちづくりプロジェクトについて、どのように考え、どのように臨んでいるのか。といったことを知るデータ不足を、マガジンが漸次補ってきた。次はそうした効用のいくつかの記事である。アンケート調査に関心があるが、ここに挙げたようなアンケートは回数が必要であり、それによる現状把握の継続を望みたい。

33号(2006.8.15)初調査、研究室院生の「夏休み」 プロジェクトに過半捧げ、オフは平均5日、週の4日はプロジェクト三昧、1日休んで、残りはバイトと研究。8月も半ばを迎え本格的に夏の到来を感じる今日この頃、都市デザイン研究室大学院生の夏休みの大要が、マガジン編集部によるアンケート調査で初めて明らかになった。

調査は、8月の1ヶ月間(=約30日)、どのような活動にどれだけの割合で時間を割いたか(割く予定か)を、おおまかに記入してもらった形式で行った。

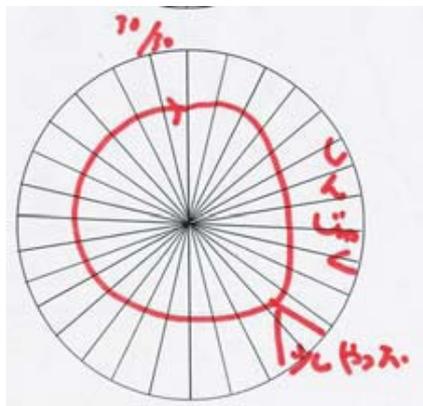


図1

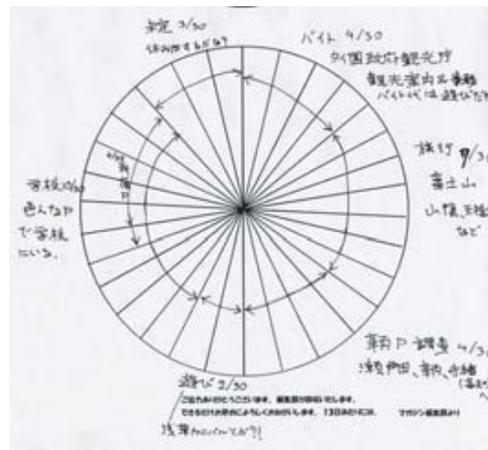
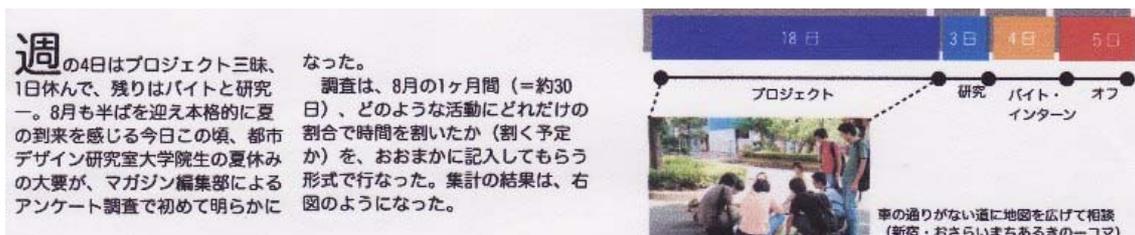


図2

圧巻の新宿PJ プロジェクトの中でも、6割以上を「新宿」が占めており、回答者の夏休み全体の、およそ4割が「新宿」に費やされていることになる。これだけのワンパワー集結は研究室史上珍しいのではないか。

旅せぬ院生 「オフ」5日中、「旅行」はわずかに1日。海外へゆく院生も1人とどまった。「ピークを外して9月に旅行する」と言う院生は多いが、それにしても、いささか寂しい夏休みではある。

予想を上回るプロジェクト偏重型の院生生活が、結果として出た。「現場こそ現実と真実が存する」との西村教授モットーが忠実に守られていること、研究室としての活気が高いレベルで保たれていることを、まずは評価するべきであろう。



しかしながら、図1のような回答票を見るときに索漠の念禁じ得ないのは評子のみではあるまい。4時間のミーティング後に書かれた歪んだ円と但し書きには、時代錯誤「モーレツリーマン」的な

疲れの色が濃く滲んでいる。Project という語が持つ「前向き」さは、ここにはない。

図 2 を見よう。バイトと、プロジェクト、旅行、遊びがバランスよく配されている。「プロジェクトをさぼってけしからん」という非難は、あたらぬ。彩りゆたかなこのような生活の背景には、事前の周到な「デザイン」があったに違いない。自分にとって、大学院における生活とは何か、何を得てどのような人間として社会へ出るのか、という大計。そのなかで、「夏」というゆたかな時間を按分して、前進とリフレッシュを実現するのか。

場当たりの享楽に耽っては、その後、当然の帰結として泥縄的にプロジェクト作業に呻吟する。飽きもせずこのルールに浸かる評子に「ライフ・デザイン」の必要且つ喫緊なることを教えてくれた、示唆深い調査であった。(bannai)

1 年生・なつやすみ作文コンクール入選作

あたしの夏休み

1 年落合 B 組 奥田紘子

今年からデザイン研に入った私は、欲張りにも京浜・喜多方・新宿と 3 つのプロジェクトを掛け持ちし、充実した毎日を送っています。今一番時間を割いているのは新宿。現地に何度も足を運び、地域の景観の特徴とは何か、どうしたらよりよい景観を築けるのかと、頭をひねっています。京浜・喜多方でも、新宿で磨いた「まちを見る目」を応用して将来像づくりに向かっているところです。

今までの夏休みの思い出といえば、ジュリー前に強行した屋久島旅行。都市の中の自然を考えたいと思っている私にとって、「ああ、人は自然の中に帰ってくるとこんなにも生き生きするんだな」と実感させてくれた大切な時間でした。

これからの夏休みでは、プロジェクトの合間を縫って、まち・建築・公園など、日本の良い空間をたくさん見て、自分が本当にいたい場所・つくりたい場所への感性を磨きたいなと思っています。

96 号(2009.4.10)デザ研に吹き込む、新たな息吹 アンケート内容 総勢 12 名の新メンバーが都市デザイン研究室に加わりました。もはや毎年恒例となっていますが、新メンバーのプロフィールや意気込みなどを紹介します。(fujii)

研究室を選んだ理由 松井大輔 D1「今までお世話になってきたまちづくりをしている人たちの役に立てる人間になるため」/阿部正隆 M1「都市の歴史、PJ 活動に興味があったので、研究に、PJ 活動に、様々なことに挑戦したいと思います」/大熊瑞樹 M1「PJ 活動に参加したかったので」

20 号(2010.4.13)春の到来、新たな風 ようこそ新入生 出会いの 4 月。新たに 12 名の仲間がやってきました。研究室の歴史ある香りを感じつつ、訪れる新たな風を感じつつ、都市デザイン研究室、2010 年度始動です。吉田健一郎「都市デザイン研究室に来たきっかけ」マガジンで各プロジェクトのことを知り楽しそうだったから。(suzuki)

週の過半がまちづくりプロジェクトというのは、壮絶である。各プロジェクトは、新学年ごとに新人が自由に選択して参加する。掛け持ちも自由であり、孫悟空のような日々である。週の過半が実動としても、年中頭から離れないでろう。

通年活動のプロジェクトで掛け持ちの繁忙さは、最も青春のさなかにあって、机上ではなく現地に出向く物理的、生理的に大変である。マガジン 33 号が伝える「現場こそ現実と真実が存する」という西村モットーをかみしめ、あるいはそうしたことがなくても、自己責任でラボライフを地域で遂行していく姿は、地域の人たちに与えるインパクトははかりしれない。一緒にイベントをした子らも、この東大生像を胸に成長することであろう。